

徒然なるままに…53

—全体授業研⑥…「子どもの主体的で深い学び」へと高めるために—

平成28年12月26日
白島小学校 研修部

遅くなりました!

はじめに

「もういくつ寝ると…」という声があちこちから聞こえてくる頃となりました。月日の経つ早さを年々感じます。私も、少しずつ歳を重ねてきたのかなあと思う今日この頃です。

今回の全体授業研は、5年生の先生方が「救急医療情報ネットワークひろしま」を取り上げての授業提案でした。年度当初から、情報の単元を開発すると伺っていましたが、まさか、一番厄介で、実践例の少ない「情報ネットワーク」の教材開発に取り組みれるとは思ってもみませんでした。その上、このシステムについて調べるために、何度も消防署に出掛けられ、携わる人たちとかかわりながら教材化を進められました。昨年までに、人と出会い、人から学ぶ社会科を实践されてきたからこそでしょう。そんな、お二人の先生方の挑戦に敬意を表したいと思います。

さて、今回は、当日の協議会でも議論の中心となった、社会科における「子どもの主体的で深い学び」について、私が一考したことをお話したいと思います。

1 「深い学び」にするために「意味」を問う

本時は、「救急医療情報ネットワークひろしま」のシステムを構造化して、このシステムのメリットを見出すことを通して、救急搬送時の「情報ネットワーク」の活用が人々の命や健康を守っていることに気付くことがねらいでした。この授業をより「深い学び」にするために、次の2点について指摘できるでしょう。

1点目は、内容構成（とらえ方）です。本時は、この情報ネットワークは、救急車や諸機関のつながりがあるから、患者をよりはやく搬送でき、人々の命や健康を守ることができるにとらえて授業構成されていました。そこで、これまでの救急搬送システムと比べて、この情報ネットワークは、諸機関相互の情報の共有化や新たな機関との連携という特色があるから、患者を適切な病院へ、よりはやくというように、効率よく搬送できるようになったととらえ直してはどうでしょうか。つまり、この情報ネットワークの仕組み（関係・構造）から、その特徴や意味を明らかにし、その仕組みの具体的な結果・効果から、「効率のよい」搬送の意味を深めていくという認識とする必要があるでしょう。社会的事象の仕組みを事実認識するばかりではなく、それらの特徴を明らかにしたり、意味付けたりする（思考→）認識が「深い学び」につながるのです。このことは、



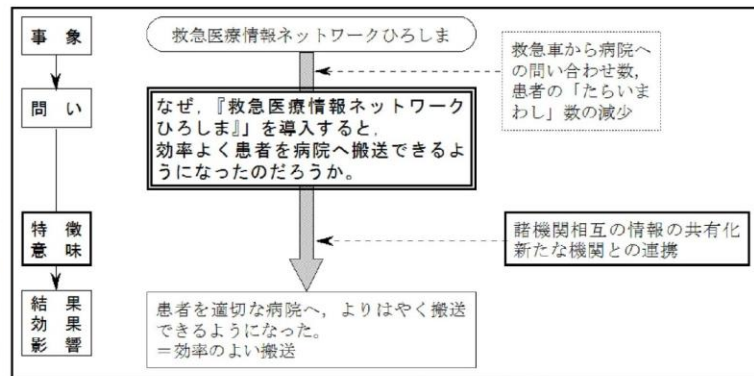
木村先生のお話にもあった、「『ネットワーク化』さ

れた社会」を見、考え、学ぶことになるのです。

2点目は、内容構成に基づく授業展開と思考です。この情報ネットワークの特徴や意味を問うための授業展開です。

まず、このシステム導入後の救急車から病院への問い合わせ数や患者の「たらいまわし」数の減少という問題場面の設定から、「なぜ、『救急医療情報ネットワークひろしま』を導入すると、効率よく患者を病院へ搬送できるようになったのだろうか。」という問いを立てます。

次に、この情報ネットワークの仕組みを「構造」的にとらえます。本時のように、子どもと問答しながら構造図にまとめたり、資料でドンと示したり、従来の救急搬送システムに新たなシステムを加えていったりなど、いろいろな手法が考えられるでしょう。



[資料 1 : 本時の内容構成と授業展開]

その上で、これまでの仕組みと「対比」しながら、「『救急医療ネットワーク』は、どんな働きをするのだろうか。」、「『救急医療ネットワーク』のどんなシステムが有効に働くのだろうか。」など問い、情報ネットワークの意味・意義に気付く展開になるでしょう。そして、このような意味があるから、効率のよい救急搬送ができると結論付けることになるでしょう。

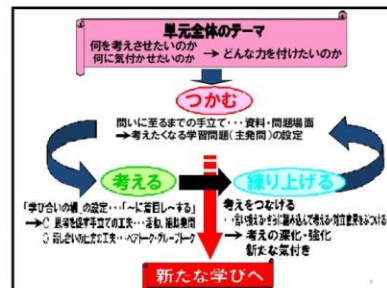
これらの2点を図示すると、[資料1] のようになるでしょう。

2 子どもの「主体的」な思考を促す手立て

今回の授業での子どもの姿を見ていて気が付いたことは、一問一答の発言です。

例えば、「救急車内部のカメラ」の画像を提示された場面です。まず、①「なんで、カメラなの。」と問い、病院の医師と救急車内の患者をつなぐことに気付くようにされました。次に、②「これでどんないいことがあるの。」と問い、医師が患者の様子を知ることができることに気付くようにされました。さらに、③「医師が患者の様子を見られると、どんないいことがあるか。」と問い、事前に医師と患者がコンタクトをとることができるメリットへと深められるようにされました。

この展開だと、どうしても、子どもが思考するというより、車内カメラの意義へと焦点化していく順番に事実を答えていくことになってしまいます。そこで、「この写真の中から、効率のいい搬送ができるようにするための工夫は、ないだろうか。」と問い、子どもが気付きや解釈をつなぎながら、車内カメラの意義に子どもら自身で行きつく展開にしたいところです。



[資料2:「学び合い」を展開するための授業スタイル]

ただ、子どもが気付きや解釈をつなぐことは、一長一短にはできるようにはなりません。

ん。このように子どもたちの手で学び合えるようになるために、次の3点のような手立てが考えられるでしょう。

1点目は、[資料2]のように、「問い→思考→発言・議論（練り上げる）」の過程で授業を展開することです。これは、本校が目指す「学び合い」を展開するための授業スタイルです。

2点目は、発言・議論をつなぎ、子どもの思考を促す手立てを講じることです。具体的には、以前もお話したように、①子どもの発言について問い直すなどして、授業者が子どもの考えをつなぐ、②他の意見との比較、言い換え、付け加え、同意、反論というようにつなぎ方を提示して発言できるようにする、③「言い換えます。」など、発言する前に自分の意見の主旨を告げて発言できるようにするなどが考えられます。

子どもの発言の後に、「どうですか。」、「いいです。」という呼応がありました。しかし、子どもが相互に学び合うためには、呼応ではなく、意見交流する必要があります。他の意見を聞いた上で、自分の考えと比較し、似ているのなら、言い換えたり、さらに続きを発言したりする、違いがあるのなら、違いを述べたり、反論したりすることによって、子どもの考えが練り上げられ、学びが深まるのだと思います。

3点目は、「待つ」ことです。子どもがさらに思考し、認識を引き出す発問をすることは、当然必要なことです。しかし、発問した後、子どもが発言した後、先生の筋書き通りに展開しなかったときなど、発問を替えたり、すぐに補助発問をしたり、授業者が意見を言ったりすることがあります。問いを投げ掛けたら、先生方は、子どもが考え、意見として言語化するまで待つ、そこまでの学習を振り返ったり、子どもの考えを整理したりして、子どもが思考するのを待つことが必要だと考えられます。

これら三つは、子どもが授業をつくる力を付けるための訓練となるでしょう。

おわりに—授業力を高め続けるために

先日、ある講演会で、「カーブが日本一になれなかったのは、1勝する重みと大変さを感じながらプレーできなかったからではないでしょうか。」という一節がありました。日本シリーズの経験のない選手も監督も、日本シリーズでの重みのある1勝を勝ち取れるピッチング、攻撃、采配ができなかったから。きっと、来年は、もっといい戦い方をするだろうという話でした。



これを、我々教師につなげて考えてみましょう。研究授業などの特別な授業だけでいい授業をしようとしても、けしてうまくいきません。でも、日頃から、教材の意義、一つ一つの発問の重みと子どもの思考の大切さを考えながら、授業づくりに取り組むことで、ここぞっという大事な場面で、的確な授業展開ができるようになり、結果として、子どもに力が付くのではないのでしょうか。日々の授業づくりにおいてこそ、切れ味のある授業展開のできる授業力が付くのだと思います。

次回、1月は、今年度オーラスの6年生の提案です。学年主任は、国外逃亡するし、聞き取りで授業づくりをする上での困難にぶつかったりと、相変わらずの波乱万丈ですが、まどめにふさわしい授業研究になりますよう、よろしくお願いいたします。